



Title	自然に関することわざについて : インドネシア語と日本語の場合
Author(s)	シャフルディン, ニニェク
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1987, 21, p. 5-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然に関することわざについて

——インドネシア語と日本語の場合——

ニエック・シャフルディン

はじめに

本論文では、日本人の自然観とインドネシア人の自然観を理解する一つの方法として、ことわざに自然に関する言葉を用いた比喻をとりあげて、その特質を文化的背景から考察することにした。

インドネシアは農業国として、発展してきた国であるから、自然はインドネシア人にとって身近なものである。自然の恵みは神の恵みであり、神をまつ。自然に対する信仰とか表現が父祖から伝えられたことばを大事にする。昔の人の言うことを大切に、これはまちがいないと信じる。そこにことわざが生まれる。農村の生活はとくに天候とは密接につながっているから、ことわざの土台にしたものが多い。天候に関するものは、まず雨についての表現から考察する。

1 「雨」について

インドネシア人にとっては、雨というものはある意味では幸福をもたらすものである。とくに、長い乾季の間は非常な暑さのため、雨の降る日を待ちかねる。雨は、植物を生かすだけではなく、人間あるいは人生を落つかせてくれるものである。確かに雨は人間に対して被害をもたらすこともあるが、農民たちにとっては、幸福をもたらすと一般に考えられている。

農民たちにとっては雨が多いと稲が豊作ということが考えられるからである。たとえば、雨が降る前に雷が多いと、雨がほとんど降らないということをも農民たちは言うが、それは事実である。

このように自然と人間の間の密接なかかわりがことばによくあらわれている。すなわち、ことわざが生じるのである。

—インドネシア語の表現と解釈—

(1) Banyak halilintar kurang hujan.

バニヤク ハリリンタル クラン ウジャン

(雷が多いと雨が少ない)

(2) Kalau ada hujan ada panas.

カロー アダ ウジャン アダ パナス

(雨があれば晴もある)

(3) Hujan emas di negeri orang hujan batu di negeri sendiri.

ウジャン ウマス ディ スグリ オラン ウジャン バトゥ デイ スグリ スンディリ

(他国には金の雨、自分の国には石の雨)

(1)の表現は、人間の性格を表し、よく喋る人は実がないという意味である。なぜこのような表現が生まれるのであろうか。雨が降る時に雷が鳴ることはよくあることだが、インドネシアにおいて、多くの雷が鳴ると雨は降って来なくなるということは自然科学から見て、はっきりとは説明されていない。しかし、昔から伝わってきたインドネシア人の説話によれば、それぞれのものに神秘の力があるということによって説明される。雨は、雷を恐れるので、大地に降ることができないという俗信がある。このことわざに表現されているように、雷は雨に対して邪魔をするようなものと思われているから、人間の性質にたとえられるのである。ここでは、雷がよく喋ることのたとえである。よく喋る人は実がないという観念になった。

(2)の表現においては、雨は時には暗い人生の意味をもつこともある。人生には、良いこと、悪いことがある。天気の変化と同じように晴れの日と雨の日がある。農民たちにとっては雨は恵みと思われるが、一般に雨は暗い日という観念がある。特にインドネシアにおいては、熱帯の国として雨

季は大雨がよく降り、被害をもたらすのである。このように人間の生活は自然の変化によってたとえられ、ことわざで表現されている。

(3)の表現における雨は、空想の雨であり、抽象的な金の雨である。そして、石の雨は、自然現象として降るのである。後者は日本語では、ひょう、あられという。“他国には金の雨、自分の国には石の雨”という表現は、インドネシアにおいては、大雨が人間にとっては非常に困難をもたらすので、たまには金の雨が降ってほしいという人の夢でもある。また、一般に貧乏な庶民にとっては、金は自らの夢という観念があり、他の地域に行って努力するのである。そこで、自らの夢が叶い、富に恵まれるので、元の故郷を忘れてしまう。しかし、人間はいくら他の国で豊かであっても、常に自らの故郷を忘れてはならないということである。

—日本語の表現と解釈—

(1)雷の多い年は稲が豊作。

(2)雨降って地固まる。

〔()の番号はインドネシア語の表現のそれと対応することわざを示す。対応するものがない場合は——で示す。〕(以下同じ)

(1)のことわざに対応できる日本語の表現には、“雷の多い年は米が豊作”というのがある。しかし、この表現はインドネシア語の表現のように人間の性質を表すものではない。この表現の意味するところは、夏、雷が多い¹⁾年は日射が強く天気が良いので、稲は豊作ということである。この表現を分析すると、日本においては雷が鳴っても雨が降ってくる。この表現の意味から見ると、夏、日射が強く、天気が良いということは雨が降らないというのであり、しかし、稲は豊作ということである。その他にも、“日照りに不作なし”という言い伝えがあるように、夏場に長く雨が降らず太陽が照る時には米がとれないことはない、とれるという意味で農家の人はよく使う。つまり、日本では良い天気が長ければ稲は豊作ということとは、こ

の表現で示されているとおりのであるが、インドネシアとは違うようである。インドネシアでは、良い天気がつづいて、雨が降って来ない場合は農作にならないというのである。四季のある日本では、夏が農耕のためには一番ふさわしい季節であり、良い天気がつづいても、農耕ができることは、自然条件が豊かであることに違いない。しかし、インドネシアにおいても、山地で雨が降らなくても日本のように農耕ができるところもある。

(2)の表現に対応できる日本語の表現、“雨降って地固まる”というのは、日本人にとっても雨は人生に対して被害をもたらすこともある。悪いことの後には良いことが来るという観念は日本人にもある。つまり、この表現の意味は人は天気が良いことを望むが、嫌な雨でも雨の後は地面が固まって良い結果を生じる。雨の後は良い天気 comes。地面が固まっていく。悪いと思ったことやいざこざの後ではかえって、ものごとが落ち着いて良い結果になることもある。人間は、どんな困難があっても、耐えねばならないということで、困難の後は幸福がきっと来るであろう。この表現と同様に、日本人は“雨の後は上天気”というのがよく使われている。

(3)のインドネシア語の“他の国には金の雨、自分の国には石の雨”という表現に対応する日本語はない。しかし、そのかわりに、同じ意味をもつ表現はある。すなわち、“住めば都”という表現である。その表現は、故郷を愛することを表している。また、元の故郷も忘れてはならないという意味もあるであろう。

2 「風」について

インドネシアにおいては、10月から3月ごろにかけて西の風の季節風がインドネシアに雨をもたらし、4月から9月ごろにかけて東南の季節風が乾いた空気を運び、乾季をもたらす。

上記のような風に対するインドネシア人の感覚は、風は自然現象であり

、植物を育て、大地を冷してくれるもので、人に親しまれるものである。熱帯のインドネシアは、安定した風が吹き、台風や暴風のような恐ろしい風はまれにしかない。確かにインドネシアの大地はそよ風に恵まれている。ヤシの葉が風にそよぐのは、インドネシアの一つの風景であり、インドネシア人にとっては涼しい気分をもたらす。このような感覚、すなわち、風が吹かなければ、植物が動かないという因果関係がインドネシア人にはある。そこで、風が人間や人生のものごとに結びつけて表現されるのである。次に「風」について、人間とのかかわりがどのようにことわざに表現されているかを考察する。

—インドネシア語の表現と解釈—

- (1) **Kalau tiada angin bertiup tak kan pokok bergoyan.**

カロー チャダ アンギン ブルチウブ ター カン ポコー ブルゴヤン

(風が吹かなければ木は動かず)

- (2) **Ke mana angin bertiup ke situ condongnya.**

ク マナ アンギン ブルチウブ ク シトゥ チョンドジニャ

(そちらの風が吹けばそちらへ向く)

- (3) **Angin Bersiru kami tahu.**

アンギン ブルシル カミ タウ

(風は叫び人が知る)

(1)の表現は、表面的な意味だけを見れば、当然であり、原因と結果を表している。しかし、この因果関係は、次のような人間に関することから表しているのである。つまり、人間が何か悪いことをしたら、きっとそのことは他人に知られるということを表している。自分のやったことが他人に知られることは当然のことであるということを用いる。ここでは、自分のやったことは悪いことで、原因と言え、すなわち風であり、他人は結果として、木にたとえられている。

(2)の表現の意味は、性質がしっかりしていない人、他人に頼っていく人のたとえである。この表現の解釈は、木は風の吹くことによって動くという考えがインドネシア人にはある。特に、インドネシアにおいては、ポホ

ンランド (pohon randu ランドの木) があり、弾力のある木で、風が吹くと揺れやすい。そちらへ風が吹けばそちらへ向くという表現はこの木から生まれたことわざで、人の性格を表し、消極的な意味である。

(3)の表現の意味は人の心の変化が他人に知られるというたとえである。風は、インドネシア人にとっては、ものごとを伝えるという感覚がある。風が何かを叫び出したので、そこで人が何かを知るのであると想像される。つまり、ここでは、風が吹き、移動することは人に知られているように、人の意図の変化が必ず他人に知られるということである。

他の風に関する表現は、アングイン ター ダパット ディタンカプ アサプ ター ダパット ディゲンガム “Angin tak dapat ditangkap asap tak dapat digenggam” (風は捕えられず煙は握られず) というのがある。

この表現の意味は、(3)の表現と同様で、噂は自然に知られるということである。しかし、ここでは、風が人間の感情とのかかわりで表現されるのである。つまり、風は人間にとって感じることはできるものであるが捕えうるものではない。風は流れつづけるものであり、隠すことはできない。煙にしても同じことであり、見ることはできるが握るものではないという考えがインドネシア人にある。

—日本語の表現と解釈—

- (1) 風は吹けども山は動かず。
- (2) 風に順いて呼ぶ。
- (3) ——

(1)は、上記のインドネシア語の表現の因果関係とは異なるもので、ここでは、風が吹いても山は動かないということである。両表現は人間にかかわりのあるものを表しているが、インドネシア語の表現は消極的な意味である。日本語の方は積極的な意味を表している。また、この表現の対象

は人の自我を表現しているのであろう。つまり、インドネシア人と日本人の自我の相違である。インドネシア人は、風と植物を結びつけて弱点をあらわしている。すなわち、インドネシア人の個人性が注目される。一方、日本人は、個人性より集団性を重視するため、風と山を結びつけて表現する。山は、樹木の集団ともいえ一本の木より、風に吹かれてもはるかに強いものである。

この(1)の日本語の表現の意味は、すなわち、周囲の事情や評判には心をとめず、自分の考えを堅持し、心をつらぬくことのたとえである。

(2)、風にさからえば、声は流されてしまうが、風向きにしたがって呼べば遠くに達する。他人の力を借りて、ことを行うことのたとえや、また勢いに乗ずることのたとえ²⁾である。この表現を見ると、インドネシア人と日本人の風に対する感覚は同様である。

すなわち、風向きにしたがうということにより、人の性格を表す。ただし、この表現でも、インドネシア人は、(1)の表現と同様に、木と関連させ、風と木に対する趣をもつことによって、表現するのである。一方、日本人は、直接に風と人間で表現するので、インドネシア人の風に対する感覚よりはっきり表現されるのであろう。

(3)のインドネシア語の表現に対して、日本語では対応する風をつかったことわざはない。しかし、意味から見ると、対応することわざはある。すなわち、人の噂は防ぎようがない。悪口などは常に世に広がるものであるといった意味のことわざである。

風に關することわざは、インドネシア語と日本語の表現の中でも非常に少ない。

3 「月」について

インドネシア人は、月は夜の闇に光を与えてくれるラト マラム (Ra-

tu malam 夜の王女) であると考えている。この表現から見ると、月は常に女性に結びつけて表現されるのである。昔から月には女の人がじっと坐って、糸を紡いでいるという伝説がある。また、インドネシア人にとって、月は心を慰めるものであり、人間の幸福のシンボルでもある。このすべてのことは、次の例にみられるように、二つに分かれ、すなわち、幸福を表しているものと、女性との関わりのある表現となる。

—インドネシア語の表現と解釈—

(1) **Kejatuhan bulan.**

ケジャトハン ブラン

(月の落下に当たった)

(2) **Bagai bulan tanggal 14.**

バガイ ブラン タンガル ウンバトプラス

(十四夜の月のようだ)

(1)、インドネシア人にとって、月は幸福であることについての多くの表現にあらわされている。月が人間に落下するということは、インドネシア人の空想でもあり、月に憧れるからでもある。月のところに飛んでゆきたいということはインドネシア人の夢でもある。このようにインドネシア人の月に対する感覚は、夜の闇の光であるから、すなわち幸福というのである。“月に憧れている”はインドネシア人の中でよく使われる比喩である。

(2)、月と女性との関わりは上述したようにはっきりしている。月はインドネシア人にとって美しいものと思われている。特に、インドネシアにおいては、満月は十四日の夜であり、この夜の月は非常に美しいので、よく女性の顔に結びつけて表現される。すなわち、若い女性の顔を表し、美しくて、円くて、明るい顔である。

他の表現に、スプルティ ブラン ディマカン ラウー “Seperti bulan dimakan rahu” (ラウーに食われた月) という男女関係を表しているものもある。ラウーは悪魔であり、月食の時、月を食べる鬼という俗信がインドネシア人にはある。ここでは、月は女であり、ラウーは男である。つ

まり、この表現は、消極的（悪い）意味の男女関係を表している。

また他の例を挙げると、スプルティ ブラン ダン マタハリ “Seperti bulan dan matahari”（月と太陽のようだ）という表現も、男女関係を表しているが、積極的な（良い）意味である。この表現では、月は女であり、太陽は男である。つまり、月と太陽は、同じく、大地を照らすものであるが、月は太陽より光が強くない。月と太陽は非常に適合したものと考えられる。したがって、女性と男性の良い配偶者にとえられているのである。

また女性にかかわりのある表現として次のものがある。

スプルティ ブラン クシアンガン Seperti bulan kesiangan（顔が昼にかかった月）

スプルティ ブラン ディパガル ピンタン Seperti bulan dipagar bintang（星に囲まれた月）

前者の表現は、顔色の悪い女性を表している。なぜ、この表現が生まれたかという、インドネシアにおいては、夜の月は非常に明るい、朝になると光が薄くなるため、あまり見事なものではないという感覚があるからである。

後者の表現は、夜空の明るい月は、その回りが、非常に美しい星である、このような素晴らしい風景がインドネシアの夜空であり、人間に感動を与えるものである。この表現の意味は、月はまるで美しい女王であり、小女に囲まれるようなものであるということを思いおこさせるのである。

— 日本語の表現と解釈 —

(1) ——

(2) 満月のような顔

インドネシア語の(1)の表現に対応できるものは日本語にはない。確かに、日本人にとって、月は良いことである。ここでは、日本独特の四季を

表している表現を挙げる。すなわち、「月、雪、花は一度に眺められぬ」という表現は日本人の風俗習慣を表す。日本は、四季があるため、月見とか花見という慣わしがある。しかし、この良いことは、同じ時に一度にする訳に行かない。

月に関して、人生の上でのことをたとえている他の表現に「月にむらぐも、花に風」ということわざがある。けっきょく、日本人は、月、花、雪、雲の自然現象に心を深く通わせて生活してきたのであるが、しかし、人間の生活には、良いことだけでなく、時には悪いことも起るものである³⁾という意味である。

(2)、日本人にとって、月は美しいものであるが、日本では満月は十五夜であるため、この夜の月は美しいものであるという感覚がある。そこで、若い女性の顔に結びつけて表現される「満月のような顔」は、美しく、円く、明るい顔を表しているのである。

女性に関して月に対する感覚は、インドネシア人と日本人の間には共通性がある。しかし、ことわざで表現されているものはごく少ない。

月について、他の表現は日本語においては次のようなものが印象的である。すなわち、「月とすっぽん」という表現である。この表現は、インドネシア語の表現の「月と太陽」ということのように比較を表している。しかし、日本語の「月とすっぽん」という表現は、形から見て、ちょっと似ているものであるが、実は、比べものにならない程、非常に違っているということで、月は天空のもの、すっぽんは大地のものであるから、この表現が生きているのである。この大きな差を表したインドネシア語の表現では、スプルティ プミ ダン ランギト (Seperti bumi dan langit 天と地) というのがある。

4 「植物」について

インドネシアは熱帯の国として、年中植物は育つが、乾季の時だけは枯れることがある。また、熱帯の地域においては、巨大な樹木が生育する。ブリンギンの木はその一つで、この木にはいろいろな伝説がある。インドネシア人にとっては、神聖な樹木と考えられている。また、この木は、守護のシンボルであり、インドネシアの国民の統一のシンボルでもある。この木は非常に巨大な木であるため、風に吹かれても、揺れることなく、どっしりとしているので、人間の性格によくたとえられている。

植物について、ブリンギンの木をはじめ、つぎのようなことわざがある。

- (1) **Seperti beringin ditiup angin.**
スプルティ ブリンギン ディチウップ アンギン
 (風に吹かれるブリンギンの月)
- (2) **Seperti ilun padi makin lama makin merunduk.**
スプルティ イルム パディ マキン ラマ マキン ムルンドック
 (稲は実れば実るほど垂れ下がる)
- (3) **Wajahnya seperti pinang dibelah dua.**
ワジャ-ニャ スプルティ ビナン ディブラー ドゥア
 (分けたびんろう樹の身のような顔)
- (4) **Tanam cempedak tumbuh nangka.**
タナム チェンプダック トムプー ナンカ
 (チェンプダックの木を植えてナンカの実がなる)

(1)の表現は上述したように、性格の堅い人を言っているもので、しっかりした人のたとえである。

インドネシア人は稲に対する深い関心がある。稲には宿る神々や精霊があり、デウィスリ (Dewi Sri) という稲の女神が信じられている。インドネシア人の日常の生活にとっては、稲は重要な役割を果たしているため、稲のことは常に自分たちの観念のうちにある。イルム パディ “ilmu padi” とは、人の生涯において、インドネシア人の哲学的な考え方であ

り、身に付くものとされている。イルム “ilum” は学問のこと、パディ “padi” は稲のことである。つまり、人間は、稲に学ばなければならないということである。稲は実れば実るほど垂れ下がる。この稲の性質はインドネシア人の人生観を形成する。このような稲にたいする観念にしたがって、このことから人間や人生のものごとに結びつけて表現されるのである。

(3)の表現の意味は、可愛らしい双子のたとえである。すなわち、良く似ている少女の顔を表している。なぜ、びんろう樹の実にたとえているか、明らかにしたい。

インドネシアにおいては、ポホン ピナン (Pohon pinang びんろう樹) という木が生育する。この木の魅力は花と実である。花がふつうの花とは違う形をしている。花びらがなく、木の幹から花がわけて、濃く、ちぢれている。この花の素晴らしさが女性の髪にたとえられる。さらに、びんろう樹の実は、色は黄色で、可愛らしい実である。この実はマカン シリー (Makan sirih 昔の婦人が好み、真っ赤な唇をする) という女の人の習わしがあるため、種子を分けて剥く。この分けたものが、双子の顔にたとえられて表現されるのである。

(4)の表現の意味は、希望されるものより上品なものを得た場合、どんなに幸福であろうということである。人にとっては、チェンプダックの木を植えたが、ナンカの実が生ずるのは良いことである。つまり、チェンプダックとナンカは同じ種類の非常に大きな果物であるが、前者は香が強いし、あまりおいしくない。後者は、形はまったく同じであるが非常においしいので好まれる。したがって、この果物はよいものとしてたとえられている。

—日本語の表現と解釈—

(1) ——

(2) 実るほど頭の下る稲穂かな。

(3) 瓜二つ。

(4) ——

(1)、日本語では上記のプリンギンの木の表現に対応できる植物に関するものはないようである。表現の意味から見ると、先述した風に関する日本語では、「風は吹けども山は動かず」という表現に当たる。

日本で神聖な樹木といえは松であろう。松は日本人の生活に深い趣のある木である。門松は新年を祝って家々の門前に飾る。松はめでたいものとされているし、竹、梅と共に植物の生命そのもののシンボルであると考えられている。また、日本の民族宗教にとっては、神木として仰がれていた⁴⁾のであるという。

(2)、稲に関する表現について、日本語の表現もインドネシア語の表現とまったく同じ意味である。日本は、インドネシアと同様に基本的には農業国であった国として、稲に対する尊敬の観念は強いようである。また、日本でも植物に神々が宿って、農作物に恵を与えるので、人々は豊作のために神々を祭っている。

稲は日本人の日常の生活にとって重要な役割を果たしているので、稲に対する見方は、インドネシア人と同様である。つまり、稲は実ると、顔を下げるといふ観念がある。さらに、稲は日本人の性格にたとえられている。「実るほど頭の下がる稲穂かな」という表現がある。稲の穂は実るほど頭が低くさがるものだが人間も徳が高く、内に充実したものがあるほど謙虚だということを言っているのである。

(3)の表現に対して、対応する日本語はない。しかし、意味から見ると、日本語の表現では、農村生活を土台にしたものがある。すなわち、「瓜二つ」という表現である。その意味は、親子、兄弟などの顔が非常に似ていることのたとえである。何故、この表現が生まれたかという点、日本人に

とって、生活の中に入り込んでいる身の回りの植物には米以外のいろいろの作物にも深いかかわりがある。瓜のようなものはことわざの主題として、人間の性格やものごとくに結ばれてたとえている。瓜を二つに割った場合、両方の形が非常に似かよっているから表現されるのであろう。ただし、インドネシア語の表現との相違は、可愛らしさということを重点としていない。

5 「動物」について

インドネシア人の伝説や民俗的な信仰には動物に生まれ変わるということもある。また、イスラム教による動物に対する感覚などもある。

また、インドネシア共和国のシンボルであるガルダ・パンチャシラは、ガルダという巨大な鷹を原型にして、インドネシアの五原則を表している。この巨大な鳥は神話的な鳥であり、勇敢な鳥で自立の精神で飛んで行けるという観念がある。それゆえに、インドネシア人の指導者たちはこの観念をインドネシア国民の基盤に創造したのである。すなわち、インドネシア人が自立的に生きることを意図するものであった。⁵⁾

動物について、人間や人生に関することがらを表すことわざとして、ここでは、鳥・犬・水牛・鹿を取りあげる。

—インドネシア語の表現と解釈—

- (1) **Burung gagak meskipun dimandikan air mawar tidak menjadi putih.**
ブルン ガガック ムシキブン ディマンディカン アイル マワル チダー
 ムンジャディー プティー

(鳥はバラの水で洗い清めても白くならない)

- (2) **Meskipun dirantai emas anjing kembali ke tempat najis.**
ムシキブン ディランタイ ウマス アンジン クンバリ ク テンバト ナジス

(金の首輪をつけて犬は汚れたところへもどる)

- (3) **Memperoleh kijang teruit.**
ムンペロレー キジャン テルイット

(足が引っかかった鹿を得る)

(4) Kerbau dicocok hidung

クルボウー ディチョチョク ヒドゥン

(水牛が鼻の穴を突き刺される)

インドネシア人は鳥に対して悪いイメージがあるので、(1)のことわざが生まれるのであろう。鳥が家上を旋回すると、それはやがてその家から死者が出るという恐ろしい迷信がインドネシア人にある。この表現では、鳥が悪い性質の人を、バラの水は教育を意味する。バラの水は、インドネシア人にとって聖なる力をもつとされ、この表現に使用されたのであろう。つまり、この表現の伝えようとすることは、人間の本心はいくら教育を受けても変えられないというのである。

犬に関する表現は、インドネシア語に多いがすべて消極的な意味を表す。ここでは、そのうち一つを例に挙げる。(2)の意味は、人の性質はどんなに教育を与えても変わらないということである。この表現の意味から犬に対するインドネシア人の感覚がはっきり分かってくる。インドネシア人にとって犬は汚い動物である。とくにイスラム教徒にとって、犬や豚は不浄な動物と考えられていた。さらに、インドネシアの民俗では、特にジャワ人の間に、人は犬に化身するという俗信がある。

(3)の表現。インドネシア人にとっては、鹿は食べられる動物なので、鹿狩りをするのである。しかし、この動物は非常に捕えにくいので、希少価値がある。鹿(小鹿)は走るのが早いですが、足が木の根に引っかかった場合、走ることはできない。そこで、狩人は簡単に鹿を捕えるのである。何も苦勞なく、偶然な幸福に出会った狩人からこの表現が生まれたのであろう。

小鹿は、インドネシア人にとっては利口さのシンボルである。あるいは理解力があり知恵のある動物と考えられている。さらに小鹿はインドネシアの伝説においては、利口な動物としてよく語られている。伝説には、小鹿は、他の強い力のある動物に対抗するために、自分の知力を利用して、

他の動物を迷わすのである。ここでは、一つのインドネシアの伝説を述べる。「胡瓜を求める小鹿」という話では、鹿は農民の畑で胡瓜を盗んだため、捕えられてしまった。農民は小鹿を殺そうと思ったので、小屋に入れたのであるが、家をしばらく出ているうちに、一匹の犬が小鹿に近づいたのであった。鹿の知力で犬は小鹿の代わりに小屋に入ってしまったので、農民はびっくりしたのである。このような利口な小鹿の話はたくさんある。

(4)の表現の意味は、愚かな人間を表している。インドネシアにおいては、愚かな動物は水牛で代表される。水牛は体が大きくて、力持ちであるが馬鹿な動物と考えられている。

水牛は、農耕用動物で、非常に怠けると思われたので、よく働かせるためには、水牛は鼻穴を付き刺されて、引っ張られて行く訳である。このような状況で水牛は耕作に従事する。そして、この水牛の馬鹿さが人の性格にたとえられているようである。

—日本語の表現と解釈—

(1)烏百度洗っても鷺にはならぬ。

(2)犬に論語

(3)兎の罠に狐がかかる。

(4)牛に対して琴を弾ず。

(1)の表現の意味はインドネシア語の表現とは、まったく同様であり、人間のマイナスの本質を表している。つまり、烏に対するインドネシア人と日本人の感覚も同様であり、烏は悪いイメージを与えるのである。烏は死臭に対して敏感であるというイメージが日本人にもある。

(2)の表現は、犬に論語を説いて聞かせても、仕方がない。犬に論語が少しもわからないように、訳のわからない人にどンドン良い教育を与えても、少しも感じないというたとえである。

犬について言えば、日本人の感覚では、犬は人間のもっとも親しい動物であり、日本人と犬は親密な関係があるので、日本人には可愛がられているのである。

(3)の意味は、思いがけない幸運のことである。鹿について、日本人にも良い動物と考えられており、神の使いである。

日本では、鹿について利口な動物という考えはないようであるが、狐や狸はずるがしこい動物であると思われている。日本の民衆には昔から狐は狸と同じように化けるといふ考えがある。

(4)の表現はインドネシア語の表現と同じく、馬鹿な人を表しているのである。牛はいくら言い聞かせても、何も分からない。牛の前で何のことをしてあげてもだめなことで、知らん顔である。

む す び

まだ、不十分なものではあるが、自然に関する比喩について、インドネシア語を比較した上で、インドネシア人と日本人の自然観を知り、自然と人間とはどのように結びつけて表現されるのかを私の論文の目的としたのである。この論文では、自然に関しては、ただ雨、風、月、植物、動物に限って考察した。このほかにも水とか川、山などのような自然物を研究したかったが、これらは今後の研究課題とする。

注

- 1) 折井英治『暮らしの中のことわざ辞典』、集英社。
- 2) 折井英治、同上。
- 3) 滑川道夫『ことわざ読本』、角川選書 159、角川書店。
- 4) 『日本を知る辞典』、現代教養文庫、社会思想社。
- 5) Prof. Dr. Kuncoroningrat, *Manusia dan Kebudayaan Indonesia* (インドネシアにおける人間と文化)。

参考文献

- 1) 中村 明『比喻表現の理論と分類』、国立国語研究所報告57、秀英出版、1977。
- 2) Sabaruddin Achmad, *Gaya Bahasa Indonesia* (インドネシア語の典型)、Balai pustaka, 1960.
- 3) 綾部恒雄・永積 昭(編)『もっと知りたいインドネシア』、弘文堂。
- 4) 共同通信社文化部(編)『共同討議 日本人の風土』、新人物往来社、1973。
- 5) 齊藤正二『日本人と植物・動物』、雪華社、1979。
- 6) L, クンチョイ(伊藤雄次訳)『インドネシアの民俗』、サイマル出版会、1979 (Lee Khoon Choy, *Indonesia between Myth and Reality*, 1976)。
- 7) 湯浅泰雄『日本人の宗教意識』、名著刊行会、1981。
- 8) 桜井徳太郎『民間信仰』、塙選書56、塙書房、1966。

(大学院前期課程修了)